教　育　研　究　業　績

氏名　佐藤　未央子
学位：博士（国文学）

研究分野	研究内容のキーワード
文学　芸術学	日本近代文学　　映画学

主要担当授業科目	文学、日本文学研究、日本文化入門、表象文化研究、スタディ・スキル、専門ゼミナール１Ａ・１Ｂ、専門ゼミナール２Ａ・２Ｂ

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1)群馬県立女子大学「日本文学特講４」（平成 30-令和 2 年度春学期） 早稲田大学「日本近代文学とマスメディア１」（令和 1-5 年度春学期） 法政大学「日本文学Ａ・Ｂ」「日本文芸研究特講（５）近代Ａ・Ｂ」（令和 3-6 年度）	平成 30 年度-令和 6 年度	文学作品に引用された映画や、同時代のニュース映像などの視聴覚資料を使用することで、具体的なイメージを提示した。また、リアクションペーパーに質問や意見を記入させ、次回それに答えるといった双方向的な講義を行った。リアクションペーパーは、コロナ禍以降、学習支援システムを利用して提出する形に切り替えた。学生が記入する時間を十分に取ることができるようになり、コメントの質が高まった。
2)同上 東邦大学「日本語文章表現Ｉ」 早稲田大学「文芸・ジャーナリズム論系演習 近代からの日本の文学１」 法政大学「大学での国語力」（令和 3 年度春学期）「ゼミナール入門」（令和 3 年度秋学期）	令和 2-3 年度	オンライン授業を行った。オンデマンド型授業では、パワーポイントに図版や映像を多く使用することで、端末を問わず、視覚的理解が進むスライドの作成を心がけた。リアルタイム配信授業としては、ZOOM 開催のほか、教室における対面授業をカメラで撮影し、ZOOM で配信するハイフレックス授業を行った。 法政大学の演習授業においては、基礎疾患を有する学生や濃厚接触などで出席が難しい学生も発言できるよう、視聴覚機器の入出力を工夫し、平等な受講機会を確保した。 対面授業が主体になった後は、必要に応じてハイフレックス授業を行った。
3)早稲田大学「文芸・ジャーナリズム論系演習 近代からの日本の文学１」	令和 4 年度春学期	発表者に対する質問や意見を、学習支援システムを利用して全員からリアルタイムで収集し、その場で発表者に還元する、近年の学会で採用されている方式を試みた。これにより、受講生全員の参加意識を高めることができた。また発表者も多くのコメントを得、レポート作成に活用できたことから、相互的な学習効果が窺えた。
4 東邦大学「日本語文章表現Ｉ」（令和 4 年度より秋学期のみ） 「日本語文章表現Ｂ／Ⅱ」（令和 6 年度） 法政大学「大学での国語力」（春学期）「ゼミナール入門」（秋学期）	令和 1-6 年度 令和 3-6 年度	資料調査の方法やレポートの書き方、研究倫理などの初歩的なアカデミック・リテラシーを示すだけでなく、授業内でも調査やグループでの議論を行わせ、内容を発表させることで、能動的な参加を促した。また、人間関係を構築することが学生生活では最重要と考え、ピア・サポートを積極的に取り入れた。
２　作成した教科書，教材 なし		
３　教育上の能力に関する大学等の評価 法政大学「日本文学Ａ・Ｂ」「日本文芸研究特講（５）近代Ａ・Ｂ」	令和 3-6 年度	授業改善アンケートにおいて、学生のコメントに対するフィードバックが多いことや、様々な映像資料を鑑賞したことが理解の補助になったといったコメントが寄せられた。毎年度、授業評価ポイント（授業の工夫度や、履修して良かったかなど）は概ね全学平均を上回っている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
５　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 中学校教諭専修免許状（国語） 高等学校教諭専修免許状（国語）	平成 28 年 5 月	平二八中専第一号 平二八高専第二号
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1)『台湾愛国婦人　復刻版　別冊 解題・総目次・執筆者索引』 「『台湾愛国婦人 復刻版』　総目次」	共著	令和 2 年 11 月	三人社	共著：上田正行、田中励儀、下岡友加、河原功、李文茹、佐藤未央子 『台湾愛国婦人』は愛国婦人会台湾支部の機関誌として、1909 年から 1916 年にかけて刊行された教養・文芸雑誌である。資料が散逸し、内実は十分に解明されてこなかったが、新たに複数の号が発見されるなど研究が進み、全号が復刻された。佐藤は「総目次」の作成を担当した。総目次では全記事のほか、竹久夢二や杉浦非水らによる表紙絵や、台湾統治の内実を示すグラフ資料についても網羅的に採録した。 pp. 63-430
2)『谷崎潤一郎と映画の存在論』	単著	令和 4 年 4 月	水声社	本書は、黎明期の映画に強い関心を寄せ、映画小説や脚本を創作した谷崎潤一郎の営為を分析したものである。谷崎と映画の関係を扱う研究は蓄積があるが、本書は通史的かつ体系的に谷崎の映画小説や言説を検証し、作品群の中で映画がどのような文脈を形成しているのかを明らかにした。谷崎は映画を単に先端的な記号として捉えたのではなく、映画が主体を揺さぶる強度を持つこと、また現実感覚をも変容させる危ういメディアであることを物語化した点で、文学と映画表現を横断した作家として嚆矢であったと論じた。 全 317 頁
（学術論文） 1)「谷崎潤一郎「アヅ・マリア」におけるセシル・B・デミル映画の機能」	単著	平成 23 年 12 月	『同志社国文学』第 75 号 pp. 72-85	谷崎の映画体験は作家論の中で考察されてきたが、作品における映画的要素の分析は解明の余地を残している。本稿は作中におけるセシル・B・デミル映画を、同時代資料をもとに分析。デミル映画は、主人公エモリの女性嗜好を変化させる機能を果たすことを検証した。これは谷崎の主題変化をも示唆しており、「アヅ・マリア」はその作品史において重要であると結論付けた。
2)「谷崎潤一郎の映画受容：明治四十四年～大正五年」	単著	平成 26 年 3 月	『同志社国文学』第 80 号 pp. 38-52	谷崎が受容した映画の概要と評価を確認し、いかなる要素が作品に抽出されているか分析した。映画の倒錯性、非現実性を好んだ谷崎は、映画タイトルを用いた修辞によって作品世界に同様の性質を付与した。また谷崎作品に特徴的な俳優へのまなざしについても検証した。谷崎の映画受容とその記録からは、第一次世界大戦前におけるヨーロッパ映画の隆盛を看取できた。
3)「谷崎潤一郎「青塚氏の話」における映画の位相：映画製作／受容をめぐる欲望のありか」	単著	平成 26 年 11 月	『日本近代文学』第 91 集 pp. 49-62	「青塚氏の話」は映画製作と受容をめぐる人々の欲望をアクチュアルに批評した。映画は、監督、観客を繋ぐ媒介となりながら、女優の性を前景化し、視覚的快楽を提供するメディアとして描かれ

				た。また本作では映画の流通過程における主体性が問われ、谷崎が映画に見出した民衆芸術性が仮託されていたと考えられる。谷崎の映画小説群に通底する批評意識を看取できた。
4)「谷崎潤一郎「人面疽」における〈純映画劇〉的可能性：大正活映による映画化の試みを手がかりとして」	単著	平成 26 年 12 月	『日本文学』第 63 巻第 12 号 pp. 22-32	谷崎が脚本家として所属した大正活映による、「人面疽」映画化の試みを視座に、作品の批評性＝〈純映画劇〉的可能性を分析した。欧米に比肩する映画を志した大正活映は、物語・表現における尖鋭性を「人面疽」に見出した。大正活映の試みは、怪奇的題材と視覚的アトラクション性を結び付け、映画と文学の協働としても意義深かったと結論付けた。
5)「谷崎潤一郎の映画受容（二）：「痴人の愛」を中心として」	単著	平成 27 年 3 月	『同志社国文学』第 82 号 pp. 89-103	主人公のナオミが作中で二重写しにされた様々な女優と、その評価や映画史的位置付けについて、関連資料を用いて具体的に考察し、小説における当時の文脈を復元した。また映画観客としてのナオミの主体性や、「痴人の愛」が映画界に対して二重に同時代性を持つと論じた。
6)「谷崎潤一郎「月の囁き」考：映画を書く／読む行為の諸相から」	単著	平成 27 年 12 月	『同志社国文学』第 83 号 pp. 38-52	谷崎が脚本を「読物」として修正した「月の囁き」を取り上げ、映画のノベライズが流行した現象や、映画脚本の一般化を背景に論じた。女性の狂気や夢遊病を扱った主題や、映画の場面を想起させる形式の両面で映画へのメタ的な批評性を有し、レーゼ・シナリオや映画詩など、言語による映画的表現の先駆としても意義のある作品であると論じた。
7)「谷崎潤一郎の映画受容（三）：大正八年～大正十年」	単著	平成 28 年 3 月	『同志社国文学』第 84 号 pp. 129-143	映画「イントレランス」、大正活映が輸入公開した四作品、映画「カリガリ博士」を取り上げて同時代の資料と批評、受容状況を精査した。谷崎の映画的・文学的想像力を補強した並行編集など映画独自の技法や、「カリガリ博士」における「狂人の幻想」を表現した「話の筋」の内実についても確認した。
8)「谷崎潤一郎「肉塊」と映画の存在論：水族館-人魚幻想、〈見交わし〉の惑溺」	単著	平成 28 年 5 月	『日本近代文学』第 94 集 pp. 136-151	映画監督の小野田吉之助が作中で撮る映画「人魚」の機能と、吉之助また女優グランドレンの動向の相関性に焦点を当てた。観客を没入させる一方で見る主体と対象との間に隔たりがある装置として水族館と映画館は類似する。映像の視覚美に加え、フィルムへの触覚的な接し方も人魚の比喩を用いて表された。主人公が撮る作中映画で描かれた水族館や人魚は、映画とはいかに存在するか、という問題（存在論）に接続する形で象徴的に描かれたと論じた。
9)「谷崎潤一郎大正期映画テクストの横断的研究」（博士論文）	単著	平成 29 年 3 月	同志社大学	谷崎潤一郎による映画言説・映画小説を、同時代資料と相対化しながら間テクスト的に論じた。谷崎が映画を、メディア論や商業的問題、ジェンダー批評、哲学的思索のもとに多角的に捉え、作品の文脈に落とし込んだことは、文学と映画の交流史において嚆矢であることを実証した。また谷崎は、創作家として物語を生成しながら、人間の精神を動かす映像の強い力とその危うさを一貫して主張していたことが明らかになった。 全 261 頁
10)「谷崎潤一郎の映画受容（四）：デミル・ルビッチ・シュトロハイム」	単著	平成 30 年 3 月	『同志社国文学』第 88 号 pp. 11-24	大正後期の谷崎が関心を寄せた初期ハリウッドを代表する三人の監督(セシル・B・デミル、エルンスト・ルビッチ、エリッヒ・フォン・シュトロハイム)を取り上げた。随筆や小説中で言及された映画作品を中心に同時代の批評や映画史的位置付けを調査し、アメリカ的な欲望の物語を扱った三者の差異や谷崎の関心のありかを報告した。
11)「谷崎潤一郎の映画受容(五)：二〇年代ハリウッド映画」	単著	平成 30 年 12 月	『同志社国文学』第 89 号 pp. 43-56	谷崎の映画批評家としての側面を探るべく、1920 年代のハリウッド映画を取り上げ、無字幕映画への評価や、俳優の演技に対する批評を確認した。

				谷崎は自作「本牧夜話」の映画化作品を、ハリウッド映画を例示しながら強く批判したが、当時の文壇においても、文芸作品の映画化に際した商業主義的なアメリカ化の是非が議論されていたことがわかった。
12)「谷崎潤一郎の映画受容（六）：ジャンルの多様化」	単著	平成 31 年 3 月	『同志社国文学』第 90 号 pp. 71-84	1920 年代後半における谷崎の小説や映画批評では、ドイツの俳優の主演映画やアメリカの児童向け映画、ミス・アメリカを題材にした娯楽映画、ドキュメンタリー映画など、言及されるジャンルが多岐にわたっていた。小説内には、映画館やテクニカラー(フィルムの部分彩色)といった、当時の映画文化が鏤められていることを確認した。
13)「上山珊瑚の足跡：新劇／映画女優としての位置」	単著	令和 3 年 3 月	『同志社国文学』第 94 号 pp. 38-53	女優上山珊瑚は、上山草人の妻浦路の妹にあたり、谷崎の映画製作にも携わりながら、その立ち位置に比して十分に検討されてこなかった。本稿では珊瑚の演劇・映画観および、彼女を取り巻く文化状況を調査した。珊瑚は大正期に混交する演劇・映画・文学の磁場にいた一方で、新劇・純映画劇運動のポリティクスを過剰に内面化したさまが窺え、近代女優をめぐる問題系の一端が明らかとなった。
14)「映画「葛飾砂子」を辿る：失われた映画（フィルム）を求めて」	単著	令和 3 年 8 月	和泉書院 泉鏡花研究会編『論集 泉鏡花』第 6 集 pp. 175-193	鏡花の短篇「葛飾砂子」は、1920 年に大正活映によって映画化された。フィルムが焼失しているため、関係者の言説や批評、スチール写真等を手がかりに作品の内実を調査した。谷崎は字幕に文学性を見出しており、原作の文章がそのまま字幕として採用された。また原作では、水害の多い深川における死生観を主題としていたが、映画でもその要素が視覚化された。以上をふまえ、小説家と映画業界の相互協力のもとに生まれた映画として意義深いと論じた。
15)「〈資料紹介〉上山草人資料の現在：ドキュメンタリー『ハリウッドを駈けた怪優』を起点として」	単著	令和 4 年 3 月	『同志社国文学』第 96 号 pp. 162-174	戦前のハリウッドで活躍した俳優上山草人の人生を追うドキュメンタリー『ハリウッドを駈けた怪優 異端の人・上山草人』について、企画者の談話と提供資料をもとに紹介した。また、公益財団法人川喜多記念映画文化財団が保管する草人の写真資料を調査し、交流のあった谷崎潤一郎が写った写真を紹介した。
16)「〈講演〉谷崎潤一郎 映画を夢む：恍惚／越境のテクスト」	単著	令和 4 年 3 月	『日本文学誌要』第 105 号 pp. 4-23	これまでに行ってきた研究の概要や方法に関する講演内容に加筆を施したものである。具体的な資料収集方法を紹介し、稀少な映画雑誌や関連資料等を渉猟・精査することの重要性について述べた。また、谷崎の映画小説や脚本における二重の越境性、すなわち表現ジャンルおよび、物語中で現実と異界を横断する様相についても分析を加えた。
17)「〈理蕃〉のメディア戦略：愛国婦人会台湾支部の映画利用を基軸として」	単著	令和 4 年 3 月	広島大学出版会 下岡友加・柳瀬善治編『『台湾愛国婦人』研究論集：〈帝国〉日本・女性・メディア』 pp. 94-117	愛国婦人会台湾支部の機関誌『台湾愛国婦人』にみられる映画記事の検証を通して理蕃政策のメディア戦略を明らかにした。愛国婦人会活動写真部による映画撮影・興行および誌面構成では、つねに「蕃人」との戦闘にともなう苦難と犠牲、そして同情を呼ぶドラマが仕立てられ、それらがプロパガンダとして機能していた。諸資料をもとに、理蕃事業がメディア・イベントと化していく様相を跡付けた。
18)「谷崎潤一郎「ドリス」試論：イメージとしての猫と「美容術」」	単著	令和 5 年 3 月	『同志社国文学』第 98 号 pp. 148-161	谷崎「ドリス」は、アメリカの映画雑誌に掲載された美容商品の広告や猫の飼育マニュアルを翻訳引用しながら、映画女優から譲られた愛猫の美しさを語る異質な作品である。未完作品ではあるものの、メディア上で提示された、理想的な美のモデルや数値化された基準に近づくために美容に励む行為は、人間だけではなく猫の手入れにも通じることを戯画的に描こうとした点で、現代的な批評性を持ちえたと論じた。

19)「谷崎潤一郎「痴人の愛」の映画化：占領期の〈倫理〉のもとで」	単著	令和 7 年 3 月	『昭和文学研究』第 90 集 pp. 129-144	小説「痴人の愛」を原作とした映画『痴人の愛』（1949 年）は、原作の設定を戦後に置き換え、物語の大筋は踏襲しながらも、結末において大幅な改変がなされた。この改変を占領期の映画界における〈倫理〉に従ったものとみて、その内実に着目した。そこで中心人物であるナオミと譲治の表象におけるジェンダー規範や、映画の製作と同時期に制定された映画倫理規程に基づく修正の実態と、改変を通して映画全体に付与されたイデオロギーについて分析を加えた。
（その他） 1)「書評　日高佳紀『谷崎潤一郎のディスクール　近代読者への接近』」	単著	平成 28 年 10 月	『日本近代文学会関西支部会報』第 24 号　p. 14	日高佳紀氏は、谷崎が昭和初期に発表した歴史小説を主な検討対象として、表現構造に加え、メディア、制度や歴史といった諸現象とテクストの関わりから、読者に対するディスクールの力学を論じた。読者の参画が不可欠なテクスト生成のあり方の再考を促す重要な研究だと評した。
2)五味渕典嗣・日高佳紀編『谷崎潤一郎讀本』 「谷崎の見た映画（戦前編）」	単著	平成 28 年 12 月	翰林書房 pp. 266-267	谷崎が小説や批評で言及した映画について網羅的に調査し、受容の内実を明らかにした。第一次世界大戦を機に、ヨーロッパの映画産業が停滞し、アメリカ映画が台頭する状況を谷崎の言説が反映していること、一方でジャンルを問わない谷崎の映画への関心の全体像が明らかになった。
3)千葉俊二・明里千章・細江光編『決定版　谷崎潤一郎全集　23 巻』「解題」	共著	平成 29 年 3 月	中央公論新社 pp. 494-527	共著：明里千章、佐藤未央子 担当は、原爆症による男性不能を取り上げた小説「残虐記」および、最晩年の谷崎が、日本文化や芸能、女優との交流、松子夫人や家族の思い出を語った随筆「当世鹿もどき」の本文校訂と解説。また、明里千章氏が担当した随筆「三つの場合」に対しても全体を確認した。
4)ロバート キャンベル、十重田裕一、宗像和重編『東京百年物語　1　一八六八-一九〇九』 解題「夜行巡査」「琴のそら音」「浅草公園」	分担執筆	平成 30 年 10 月	岩波書店 p. 165 、 p. 205 、 p. 265	東京を舞台とする短篇小説を渉猟し近代都市東京の歴史を追体験するものとして編まれたアンソロジーの第 1 巻。主に明治期の作品を収録した。担当した解題では、泉鏡花「夜行巡査」では官公庁が集中するエリアと登場人物のキャラクター性の関係を、夏目漱石「琴のそら音」では小石川の起伏が多い地形と物語展開の連関性を、木下杢太郎「浅草公園」では同時代に著しく発展した盛り場・浅草公園について解説した。
5)ロバート キャンベル、十重田裕一、宗像和重編『東京百年物語　2　一九一〇-一九四〇』 解題「泥濘」「水族館」	分担執筆	平成 30 年 11 月	岩波書店 p. 153、p. 211	主に大正期から昭和戦前期の作品を収録した。担当した解題では、梶井基次郎「泥濘」において、開通したばかりの山手線に乗り街へ出て、銀座を周遊しながら衝動的な消費行動に悩む主人公の同時代性を指摘し、堀辰雄「水族館」については、浅草という陽の場所における暗部が刹那的な恋愛関係に託して描かれたこと、また当時の映画文化も部分的に描き込まれていることを解説した。
6)ロバート キャンベル、十重田裕一、宗像和重編『東京百年物語　3　一九四一-一九六七』 解題「有楽町の思想」「灰色の月」「下町」「アジンコート」	分担執筆	平成 30 年 12 月	岩波書店 p. 67 、 p. 89 、 p. 139、p. 249	戦時下から戦後の作品を収録した。担当した解題では、稲垣足穂「有楽町の思想」で、電車から見える空襲の焼け跡が書割的に表現されたこと、志賀直哉「灰色の月」では、衰弱した浮浪児が向かおうとした上野という場所の意味を指摘し、林芙美子「下町」では戦後を強く生き抜こうとする自立した女性の生き様を、内田百閒「アジンコート」では関東大震災で失われた大切な人や場所が戦後に再び懐古されるさまについて解説した。
7)京都と文学研究会編『ものがたりたちの京都　京都文学入門』 「コラム　京都と映画文化」	単著	令和 1 年 10 月	武蔵野書院 pp. 150-151	京都における日本映画製作の歴史を明治の最初期から戦後まで跡付けた。歴史的建築物の多い京都は時代劇撮影に格好の舞台で、撮影所も次々と創建された。また商店街には多くの映画館も建設され、まさに映画の街としての歴史を刻んできたことを確認した。現在では多様な映画祭が開催され、映画の資料館も設けられるようになり、映画文化を保存・発信する場としても重要な街となっ

				ていることを紹介した。
8)「書評　川崎賢子 著『もう一人の彼女 李香蘭／山口淑子／シャーリー・ヤマグチ』」	単著	令和１年11月	『日本近代文学』第101集 p.323-326	川崎賢子氏は、世界的に活躍した女優・李香蘭／山口淑子のイメージが生成されていくさまを、戦前と戦前の連続性のうちに、メディア横断的な視座から卓抜に論じた。また、戦前から戦後にわたる日中米ソの国際関係の中で、李香蘭が果たした役割を批評的に明らかにした点で、映画史研究のみならず、歴史研究においても重要な著作だと評した。
9)「変奏される〈村上春樹（ハルキ・ムラカミ）〉：国際シンポジウム見聞記」	単著	令和２年10月	『WASEDA RILAS JOURNAL』第８号 pp.419-421	早稲田大学で開催された、舞台上演とパネルディスカッションからなる国際シンポジウム「村上春樹と国際文学」のレポート。故蜷川幸雄演出の舞台「海辺のカフカ」における翻訳とアダプテーションの相乗効果や、村上文学が「世界文学」たりうる所以が実証的に確認されたと報告した。
10)「万華鏡」	単著	令和３年12月	『泉鏡花研究会会報』第 37 号 p.16	泉鏡花文学の魅力について、メディア・ミックスが多く生まれている点に焦点を当てて、具体的な作品をいくつか紹介した。また、場面の視覚的な美しさのみならず、音読することで情感が伝わる文体ゆえに、鏡花作品が多様なパフォーミング・アーツに向いていると分析した。
11)「谷崎潤一郎×映画」	単著	令和４年１月	鳥影社『季刊文科』 第87号　p.32-39	特集「作家×映画 映画を愛した作家たち」の一環で、谷崎潤一郎の映画観や映画小説、映画脚本について、概要を紹介した。谷崎は小説の中にも多くの映画的要素を取り入れ、また、黎明期の映画製作に携わった点で、映画を愛した多くの文士のうちでも、卓抜して映画に関して高い見識を持っていたことを確認した。
12)「（無声）映画の秘かな愉しみ」	単著	令和４年３月	『そとぼり通信』 第66号　pp.1-2	最初期の映画は一般的に「無声映画」と称されるが、実際には伴奏音楽を奏でる楽士と、内容を説明する活動弁士によるライブ・パフォーマンスであったことをふまえ、現代における伴奏付きの無声映画上映会や弁士の活動について紹介し、現代にもその伝統や技芸が受け継がれていることを述べた。
13)「私が注目する鏡花作品この一作⑥　「売色鴨南蛮」」	単著	令和４年12月	『泉鏡花研究会会報』 第38号　p.12	泉鏡花「売色鴨南蛮」の、溝口健二による映画化『折鶴お千』を取り上げ、原作との差異や特徴的な演出について紹介した。鏡花の文体や構成、描写には映画性が見出されるが、各々の表象の質や方法の変化を相対的・通時的に捉えていく必要があると指摘し、1930 年代に活性化する文学と映画の相互刺激を考究するために示唆に富む作品であると述べた。
14)泉鏡花記念館・泉鏡花研究会編『泉鏡花生誕一五〇年記念 鏡花の家』「谷崎潤一郎」	分担執筆	令和５年10月	平凡社 pp.224-225	泉鏡花と谷崎潤一郎の交流について、谷崎潤一郎を軸として紹介した。谷崎は鏡花に深い尊敬の念を抱いており、生涯にわたって私淑し続けた。鏡花逝去に際しては「日本からでなければ出る筈のない特色を持つた作家」と評して追悼した。
15)「展望　谷崎潤一郎と映画（化）研究の現在」	単著	令和５年11月	『日本近代文学』 第109集 pp.170-175	芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した拙著に関して、概要とねらいについて説明したうえ、映画資料の収集方法や、谷崎作品の映画化に関する研究の進展について展望した。また、近年の映画化作品についても言及した。
16)「紹介　北國新聞社編『鏡花文学賞５０年』」	単著	令和５年12月	『泉鏡花研究会会報』 第39号　p.9	1973 年に始まった鏡花文学賞（泉鏡花文学賞・泉鏡花記念金沢市民文学賞）の歩みを跡付けた書籍について紹介した。賞の足跡や斯界への貢献度を知るためのみならず、戦後・現代文学史を紐解くためにも知見をもたらしてくれる一冊だと評した。